

園芸活動をした園児をみる保育者の姿勢に関する一考察 — 福岡市と北九州市の保育所の事例から —

山本俊光^{1,2}・森 啓一郎¹・松尾英輔^{1,3}

¹園芸福祉研究会 ²福岡大学 ³東京農業大学農学部

A Study on Nurturing Teacher's Attitude Observing Children's Behavior during Gardening in Fukuoka and Kitakyushu, Japan

Toshikou YAMAMOTO^{1,2}, Keiichiro MORI¹ and Eisuke MATSUO^{1,3}

¹Japanese Society for the Study of Horticultural Well-Being, ²Fukuoka University,

³Faculty of Agriculture, Tokyo University of Agriculture

Summary

This questionnaire study on gardening and its effects was designed to investigate changes in the behavior of children and the importance of the viewpoint of nurturing teachers in 120 schools in Fukuoka and Kita Kyushu, Japan. Descriptions of the behavior of the school children covered five areas of the nurturing goals of teaching. The more the nurturing goals were described in the teachers' responses, the more improvements were reported in the observed behaviors of the children. At the schools with more detailed descriptions of nurturing approaches, senior management staff, such as the director and chief teacher, recognized the value of the nurturing effects of gardening and participated in such activities with the children. These results indicated that the effects of a gardening program on advancing a nurturing environment, and hence enhancing children's behaviors, depend on the senior staff themselves having wide viewpoints and rich experience in nurturing approaches.

Keywords: effects of gardening, elder management staff, wide viewpoints

園芸活動の効果, 所長, 広い視野

はじめに

筆者ら(2006)は、保育所での園芸活動体験が1年間という短い期間であっても、作業頻度や栽培植物種数が少なくても、保育指針にあるすべての保育内容領域(「健康」, 「人間関係」, 「環境」, 「言葉」, 「表現」)に関して、園児の言動に良い影響がみられたことを報告した。この園児の言動とは、園芸活動時、および園芸活動後の園児にみられた言動すべてのうち、保育者(保育関係者すべてを含む)の記憶に残った園児の様子をさす(以後園児の言動)。

園児の言動は、保育者が教育者の立場から気がついた園児の様子を書き記したと考えられる。したがって、保育者の記述した内容は、園芸活動が子どもの発達に与える影響への保育者の関心の高さや、園芸活動による教育的な効用への気づきを反映しているともいえる。

先の報告(山本ら, 2006)では、園芸活動を取り入れ

た保育のねらい(以下保育のねらい)や園児の言動を捉える指標として保育指針の内容5領域を用いた。本報告でも、この指標をもとに、保育のねらいと、園児の言動に関する記述を整理し、保育のねらいと園児の言動の記述の相違点を踏まえ、保育所間の記述の違いを明確にし、その違いが園芸活動によるものか、保育者の園芸活動へのかかわり方によるものか検討した。

調査方法

福岡市と北九州市は、ともに人口100万人前後の政令指定都市で、都市化が進んでいる一方、農村地域もあり、市立と私立の保育所がともに多いことから対象地域とした。福岡市では2004年2月に、北九州市では2005年10月にすべての認可保育所にアンケート用紙を送付した。それぞれ送付してから1か月以内に回答用紙を回収した。

調査内容は、①~③の通りである。①園芸活動を行う保育のねらいと園芸活動時および活動後の園児の言動

2008年7月11日 受付. 2009年1月31日 受理.

(自由記述)。これらは、保育のねらいと園児の言動の記述の相違点、保育所の記述の相違点を検討する際に用いた。②園児の作業頻度や栽培植物種数、作業内容、作業場所(以上いずれも選択方式)。これらは、園芸活動の実態を検討する際に用いた。③回答者、勤務する保育士と園芸活動の指導的役割をした保育士、その人数と年代、園芸活動を行った職員の役職。これらは、園芸活動の担い手を検討する際に用いた。

公立38(福岡市立22,北九州市立16),私立95(福岡市27,北九州市68),不明2(北九州市)の合計135の保育所から回答を得た(回収率41%)。このうち、園児が園芸活動を行い、園児の言動について回答した120園について取りまとめた。

なお、本報においても、田中(2000)の文例を参考に、保育のねらいと園児の言動の記述を保育内容5領域に分類した。記述内容によってはいくつかの領域にまたがるものもあり、それらは該当する領域すべてに記述があったものとして取り扱った。統計処理には χ^2 検定および二つの平均値の差の検定を用いた。

結 果

1. 保育のねらいと園児の言動の比較

保育内容5領域は、保育者が園児の発達をみる指針(柴崎,2001)とされる。保育者が記述した保育のねらいや園児の言動について内容が類似するものを整理したところ、保育のねらいは38,園児の言動は40にまとめられた。

保育のねらいと園児の言動のそれぞれについて記述内容、記述した保育所数とその割合(%),各記述内容が属する領域、各領域に属する内容数、領域別にみた記述内容の総数(延べ記述数)、保育所あたりの平均記述数を示したのが第1表である。

保育のねらいは、園児の言動を記述した保育所の94%(113園)が記述していた。保育のねらいの延べ記述数を領域別にみると、「環境」299、「表現」152、「健康」55、「人間関係」18、「言葉」1であった。同様に園児の言動のそれは、「環境」405、「表現」394、「健康」72、「人間関係」125、「言葉」65と、保育のねらいに比べ、どの領

Table 1. Classification of Descriptions by Nurturing Schools with respect to the goals of gardening and developing desirable children's behaviors. This table presents a summary of the number of nursery schools surveyed and descriptions relating to five nurturing goals. 第1表. 保育のねらいと園児の言動に関する記述内容と記述数、各内容が属する領域。

	記述された内容		保育のねらい		園児の言動		記述内容の属する領域					
	保育のねらい	園児の言動	保育所数	保育所の割合(%)	保育所数	保育所の割合(%)	環境	表現	健康	人間関係	言葉	
① 保育のねらいと園児の言動が対応、あるいは対応すると考えられる内容	命を知る・命の大切さを知る	命を知った・命の大切さを知った	38	(32)	17	(14)	●					
	生長を楽しむ・喜ぶ	生長(育てること)を楽しんだ、喜んだ	27	(23)	38	(32)	●	●				
	やさしい気持ち、大事にする心を育む	やさしい気持ち、大事にした	22	(18)	30	(25)	●					
	収穫を喜ぶ	収穫を楽しんだ	17	(14)	20	(17)	●	●				
	観察する力を養う	気に掛け観察した	14	(12)	21	(18)	●	●				
	生長(育てること)に興味、関心をもつ	生長(育てること)に興味、関心を示した	12	(10)	26	(22)	●	●				
	植物(野菜・花)に興味、関心をもつ	植物(野菜・花)に興味、関心を示した	12	(10)	31	(26)	●	●				
	四季・旬を知る	四季・旬を知った	10	(8)	7	(6)	●					
	色や形、大きさ、感触、においに気づく	色や形、感触、においに気づいた	8	(7)	21	(18)	●	●				
	生命の不思議さに気づく	不思議に思った、驚いた	7	(6)	10	(8)	●	●				
	もっと知りたいと思う知識欲や科学の目をもたせる	探究心が芽生えた	6	(5)	14	(12)	●					
	協力する	協力した	5	(4)	3	(3)		●			●	
	生長を待つ心を養う	生長を待つことができるようになった	2	(2)	3	(3)	●					
	おだやかになる	情緒が安定した	2	(2)	1	(1)				●		
	感情を言葉で表す	感情をともなった言葉で表した	1	(1)	19	(16)		●				●
食育の一環		25	(21)	58	(48)	●				●		
命をいただくことへの感謝の気持ちを育てる	食べた、食べようとした	10	(8)			●						
食べることを楽しむ		7	(6)				●	●				
食に関心をもつ	味や食材、調理に関心を示した	6	(5)	31	(26)	●						
調理をする		3	(3)			●						
味わって食べる		8	(7)				●	●				
本物の味を知る		1	(1)			●						

記述された内容		保育のねらい		園児の言動		記述内容の属する領域						
保育のねらい		園児の言動		保育所数	保育所の割合(%)	保育所数	保育所の割合(%)	環境	表現	健康	人間関係	言葉
① 保育のねらいと園児の言動が対応しているか、あるいは対応すると考えられる内容	感性が育つ	感性が育った	20	(17)	1	(1)		●				
		嬉しそうにした、喜んだ			28	(23)		●				
		変化に気づいた			20	(17)	●	●				
		絵画の表現がよくなった			3	(3)		●				
		美しいと感じる心が芽生えた			3	(3)		●				
	働く大切さを知る	働いた	8	(7)	4	(3)					●	
		肥満体の子がいない			1	(1)					●	
	人と交流をする	子供同士かかわりあった	6	(5)						●		●
		保育士とかかわりあった			20	(17)		●				●
		保護者とかかわりが増えた			13	(11)		●				●
異年齢の子とかかわりあった				12	(10)		●				●	
生長・成長に必要なものを知る 命のつながりを知る 花の名前、野菜の種類を知る からだのつくりを知る	生長・成長に必要なものに興味を示した	3	(3)	7	(6)	●						
	知識が増えた	6	(5)			●						
		3	(3)	17	(14)	●						
		4	(3)			●						
② ①以外のねらいの内容	生長の過程を体験する	43	(36)			●						
	自然と触れ合う	13	(11)			●						
	生命のあるものを継続して育てることの大切さを知る	4	(3)			●						
	好奇心や意欲を育てる	3	(3)			●	●					
	責任感をもつ	3	(3)				●			●		
	生きる力をはぐくむ	2	(2)							●	●	
	充実感・達成感を得る	2	(2)							●	●	
	創造性・表現力を養う	2	(2)				●					
	爽快感を得る	1	(1)							●		
	③ ①以外の園児の言動の内容	情報を伝達する言葉を用いた			40	(33)		●				●
自主性がでた				20	(17)		●				●	
周りの自然に興味を示した				12	(10)	●	●					
小動物、他の動物に興味を示した				10	(8)	●	●					
よく遊んだ				7	(6)	●	●	●				
意思を伝達する言葉を用いた				6	(5)		●				●	●
数、大きさ、重さ、長さに関心を示した				4	(3)	●						
相手を気遣った				1	(1)		●				●	
規則を守った				1	(1)					●	●	
道具の使い方を知った				1	(1)	●						
総内容数						31	31	11	14	3		
ねらいの記述の総数						299	152	55	18	1		
園児の言動の記述の総数						405	394	72	125	65		
保育所あたりの平均記述数						3.2±0.3	4.9±0.5					

域でも1.3~65倍多かった。保育所あたりの平均記述数は、保育のねらいの3.2に対して園児の言動では4.9と、園児の言動が多かった。

総内容数は、「環境」31、「表現」31、「健康」11、「人間関係」14、「言葉」3と、「環境」や「表現」の内容が多かった。

園芸活動のねらいとして、梁川・河嶋(2003)は、「生長の過程を体験する」、「命を知る・命の大切さを知る」、「食べられるようにする、食育」が多いことを報告

している。本調査でも同様に、保育のねらいでは「生長の過程を体験する」が36%と最も高く、つぎは「命を知る・命の大切さを知る」(32%)、「生長を楽しむ・喜ぶ」(23%)、「食育の一環」(21%)であった。

園児の言動では「食べた、食べようとした」が48%と最も高く、つぎは「情報を伝達する言葉を用いた」(33%)、「生長(育てること)を楽しんだ、喜んだ」(32%)、「植物(野菜・花)に興味、関心を示した」(26%)であった。

記述内容は多様であったが、幾つかのまとまりに分けられた。保育のねらいの「生長を楽しむ・喜ぶ」と、園児の言動の「生長を楽しんだ・喜んだ」が呼応するように、記述内容の約半数は、保育のねらいと園児の言動が類似する内容であり、保育のねらいに比べ、園児の言動を多く記述した保育所の割合が高かった（第1表）。

ところが、「命を知る・命の大切さを知る」、「感性が育つ」といった内容では、園児の言動の値は保育のねらいに比べ低かった。とくに、園児の言動の「感性が育った」は1%と極めて低かった。一方、保育のねらいにはなかった「嬉しそうにした、喜んだ」(23%)、「変化に気づいた」(20%)、「絵画の表現がよくなった」(3%)、「美しいと感じる心が芽生えた」(3%)（第1表）などの具体的な記述が園児の言動にみられた。

園児の言動と呼応せず、保育のねらいだけに分類された内容には、「生長の過程を体験する」(36%)、「自然と触れ合う」(11%)などの抽象的な内容が多かった。

園児の言動だけに分類された内容には、「情報を伝達する言葉を用いた」(33%)や「意思を伝達する言葉を用いた」(5%)などの言語に関する内容が多かった。なお、この言語に関する内容は、記述内容をまとめる際に園児が発した具体的な言葉の数々の記述をまとめたものである。

このように、多くの保育所が保育のねらいや園児の言動に生長や命、食に関連した内容を記述していた。保育のねらいと園児の言動の記述を比べると、双方が呼応した内容は約半数であり、呼応した内容の多くは保育のねらいに比べ園児の言動の割合が高かった。保育のねらいには抽象的な表現が多かったが、園児の言動では園児の姿が具体的に記述されていた。

2. 三つの記述領域数群

1) 記述領域数群の検討

保育所保育指針には、保育士が援助して子どもが身に付けることが望ましい事項について発達の側面から5領域が設けられている（厚生省、1999）。保育は、子どもの活動を通して展開されるので、その活動は一つの領域だけに限られるものではなく、領域間で相互に関連を持ちながら総合的に展開していくものと捉えられている。つまり、園芸活動においても、基本的には5領域が関連しており、園児の姿を観察していくと、総じて5領域に属する言動が捉えられるような保育があるべき姿といえる。

保育内容5領域が発達をみる指針とすると、5領域は発達をみる視点ともいえる。保育者が園芸活動を行うことでどのような教育的な効用に気づいたか、どこに関心があったかを知るには、5領域のどの領域にどのように記述がみられたかを調べるのが一つの手立てとなる。

そこで、園児の言動について記述した領域数で保育所を分けたところ、記述内容が一つの領域だけであった保育所（以下1領域）は9か所、二つの領域にわたって

た保育所（以下2領域）19か所、さらに三つの領域（以下3領域）36か所、四つの領域（以下4領域）37か所、五つの領域（以下5領域）19か所であった。1領域と2領域、4領域と5領域間では差はみられなかったが、あとのどの組み合わせにおいても明らかな差がみられた。

そこで、1領域と2領域の保育所（以後グループ1・2とする）、4領域と5領域の保育所（以後グループ4・5とする）、3領域を記述した保育所（以後グループ3とする）の三つに分け、この3グループについて記述数や各領域で記述した保育所の割合、記述内容の検討を行った。

なお、園児の言動について市立と私立、福岡市と北九州市、地域環境（農村、住宅地、商業地）、回答者の役職（所長、主任、担任）間でそれぞれ領域ごとの記述数を比べたところ、有意差は認められなかった。

2) 記述領域数群ごとにみた保育のねらいと園児の言動

(1) 記述数と記述領域

保育のねらいの平均記述数は、グループ1・2では 2.6 ± 0.5 、グループ3は 3.2 ± 0.5 、グループ4・5は 3.9 ± 0.5 であった。いずれの組み合わせについてもグループ間に明らかな差がみられた（第1図）。

園児の言動の平均記述数は、グループ1・2では 2.1 ± 0.4 、グループ3は 4.1 ± 0.5 、グループ4・5は 6.8 ± 0.7 であった。すべての組み合わせにおいてグループ間に明らかな差がみられた（第1図）。

グループ1・2では園児の言動の平均記述数は、保育のねらいの0.8倍であったのに対して、グループ3は1.3倍、グループ4・5は1.8倍と多かった。

平均記述数（第1図）を領域別にみると、すべてのグループで保育のねらい、園児の言動ともに「環境」や「表現」が多かった。グループ1・2とグループ3では保育のねらい、園児の言動ともに「環境」がもっとも多かった。グループ4・5の保育のねらいでは「環境」、園児の言動では「表現」がもっとも多かった。

また、園児の言動ではグループ1・2は「環境」と「表現」のみ、グループ3および4・5ではすべての領

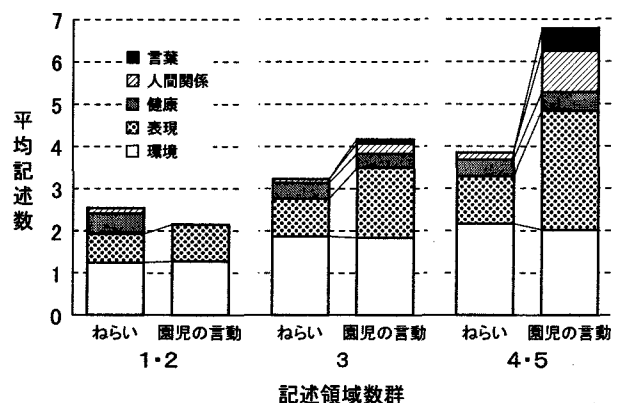


Fig. 1. Average number of descriptions relating to gardening goals and children's behavior.

第1図. 保育のねらいと園児の言動の領域別平均記述数.

域に記述がみられた。グループ4・5の「人間関係」や「言葉」は、グループ3のそれより多かった。

保育所に関して各領域を記述した保育所数をみたところ、保育のねらいではグループ1・2から順に「環境」82, 92, 93%, 「表現」68, 72, 66%, 「健康」36, 39, 45%と、グループ間に大きな差はなかった(第2図)。「人間関係」では7, 8, 18%, 「言葉」0, 0, 2%といずれも極めて低かった。各領域を記述した保育所数でグループ間に明らかな差はみられなかった。

同様に園児の言動(第2図)では、グループ1・2から順に「環境」97, 100, 100%, 「表現」66, 100, 100%と高かった。「健康」「人間関係」「言葉」は、グループ3と4・5だけに記述された。「健康」ではグループ3は61%, グループ4・5は71%と、その差は大きくはなかった。一方、「人間関係」ではグループ3は19%, グループ4・5は86%, 「言葉」ではグループ3は17%, グループ4・5は71%と両グループの差は大きかった。各領域を記述した保育所数ですべてのグループ間で明らかな差がみられた。

このように、保育のねらいでは平均記述数でグループ間に差はみられたが、各領域を記述した保育所の割合ではグループ間に差はみられなかった。つまり、どのグループも多く保育所で、園児の身の回りに植物という「環境」を整え、栽培を体験する機会を設け、園児が喜んだり感動したりして「表現」力を発揮し、よりよく食べることで「健康」になることをおもなねらいとしていた。

園児の言動では、平均記述数や各領域を記述した保育所の割合は、ともにグループ間で明らかな差がみられた。記述領域数が多いグループ3や4・5の平均記述数は多く、保育のねらいの平均記述数よりも多く記述されていた。また、これらの保育所の記述内容は5領域すべてにわたり、とくにグループ4・5では記述した保育所の割合はすべての領域で高かった。

(2) 記述内容

三つの記述領域数群で主な記述内容を比べると、保育のねらいではどのグループも第1表の記述と同様の傾向がみられた。

園児の言動では、「命を知った」「収穫を楽しんだ」は、グループ1・2がグループ4・5より8~10%高く、「収穫を楽しんだ」は、グループ3がグループ4・5より12%高かった。「味や食材、調理に関心を示した」「気に掛け観察した」「嬉しそうにした、喜んだ」「変化に気づいた」「色や形、感触、においに気づいた」は、グループ4・5が他の二つのグループより11~30%高かった。この7項目についてそれぞれのグループ間で有意差がみられた。

さらに、グループ4・5では、数量的な概念につながる「数、大きさ、重さ、長さに関心を示した」、生物概念の獲得(稲垣, 1995)につながる「生長・成長に必要なものに興味を示した」、表現力の豊かさを示す「植物の育ちを体験し、よく観察した後の絵は明らかに違ってきた」など、記述領域数の少ないグループにはみられない記述もあった。

3. 園芸活動の実態と活動にかかわった保育者

上記のように、三つの記述領域数群の記述を保育のねらいと園児の言動について比較したところ、園児の言動にグループ間で顕著な違いがみられた。その違いが、園芸活動の差によるのか、園芸活動にかかわった保育者の違いによるのか検討した。

1) 園芸活動の実態

栽培場所である「農地」「花壇」「容器のみ」「借地」についてグループ間の差をみたところ、明らかな差はみられなかった(第2表)。

保育所あたりの栽培植物種数は、記述領域数の多いグループに多い傾向はあったが、グループ間に明らかな差はみられなかった(第2表)。

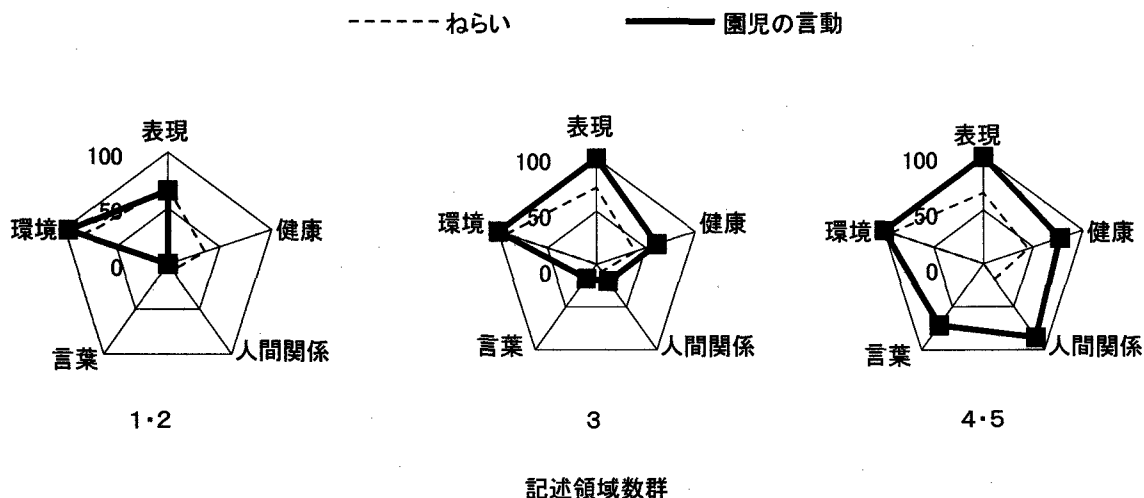


Fig. 2. Percentage of nursery schools in each of five areas of nurturing goals, within three school groups: Nursery schools which described nurturing goals and children's behaviors are presented as a percentage of the total nurseries surveyed.

第2図. ねらいと園児の言動について保育指針の各領域に記述した保育所の割合(%)。

Table 2. Summary of the space for gardening, the type and frequency of gardening, and the teacher's participation for each of the three groups.

第2表. 記述領域数群別にみた園芸活動の実態と保育者のかかわり.

内容	記述領域数群		
	1・2	3	4・5
農園	54	44	64
栽培場所 (%)	花壇	36	35
	容器のみ	11	21
	借地	29	15
栽培種類数	8.6±2.0	9.9±1.8	11.0±1.7
50%以上の保育所で行われた作業種類数	8	9	9
作業頻度 (%)	毎日	41*	45
	週に1~数回	31	35
	月に数回かそれ以下	27	20
保育者のかかわり	かかわった保育士の割合 (%) ²	<30	<30
	活動を主導した保育士数 (人)	2.6±0.7*	4.0±1.0*
	担任と主任または担任と所長 (%)	43	47
	担任と主任と所長 (%)	14*	26
	担任と職員 (所長, 主任以外) (%)	25	18
担任だけ (%)	18	9	

* 印のグループ間は5%レベルで有意.

² 園芸にかかわった保育士が勤務する保育所の保育士に占める割合 (%).

作業内容を17種類から選択させたところ、3グループとも50%を超えた作業は、「土入れ」、「種まき」、「苗植え」、「水やり」、「イモの植え付け」、「草取り」、「収穫」、「種取り」の8項目であり、グループ3および4・5は「給食に提供」も行ってた。

作業の種類数は、記述領域数の多いグループに多い傾向はあったが、グループ間に明らかな差はみられなかった(第2表)。

作業頻度では、「毎日」でグループ1・2とグループ4・5間に有意差がみられ、グループ4・5に多かった。グループ3はいずれのグループ間とも明らかな差はみられなかった(第2表)。

以上のことからグループ間で差がみられた園芸活動は、作業頻度のみであった。

2) 保育者のかかわり

園児に園芸活動を実際に指導したもっとも身近な保育士のかかわりを探った。

園芸活動にかかわった保育士がその勤務する保育所のすべての保育士に占める割合は、3グループとも30%未満がもっとも多く、グループ間に差はみられなかった(第2表)。園芸活動に主導的な役割をした保育士の平均人数では、グループ3がもっとも多く、グループ1・2との間に有意な差がみられた(第2表)。

所長(副所長を含む)か主任が園芸活動に関与した保育所の割合は、グループ1・2から順に57, 73, 72%であった。そのなかで所長がかかわった割合は、70~77%と大半であった。詳細には、「担任と主任と所長ら」でグループ1・2と4・5で有意差がみられ、グループ

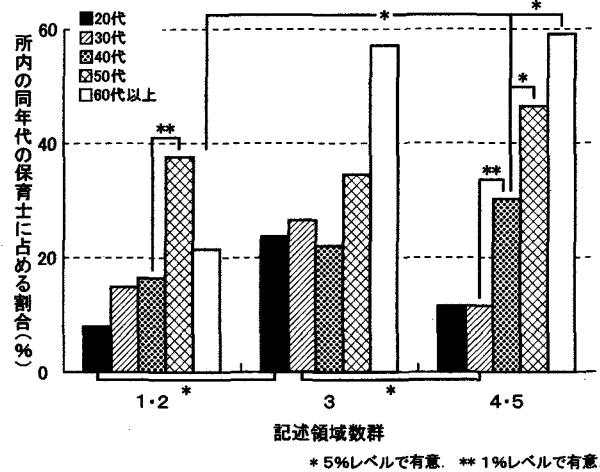


Fig. 3. Percentage of enthusiastic leaders in gardening among the same age group in the same nursery school.

第3図. 主体的に園芸を推進した保育士がその保育所の同年代の保育士に占める割合.

4・5の割合が高かった(第2表)。

園芸活動に主導的な役割をした保育士の年代を、勤務する保育所の同年代の保育士に占める割合でみたところ、グループ1・2では50代は、40代と比べて明らかに高かった(第3図)。グループ3では50代以上に高い傾向はあるが年代間に差はみられず、30代以下のかかわりは、他のグループより多かった。グループ4・5では40代以上が高く、30代以下は低かった。40代以上でも50代以上と40代には明らかな差がみられた。

本調査において20~40代の保育士は、ほとんどの保育所(90~98%)に勤務していたが、50代は85%, 60代は

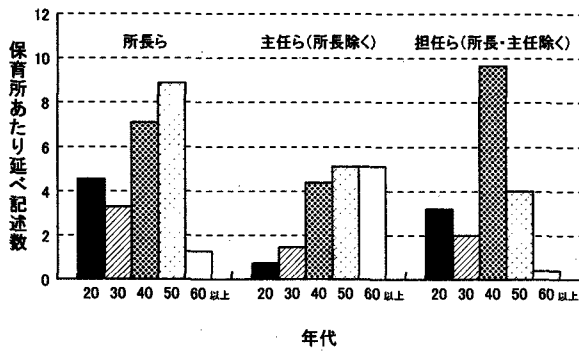


Fig. 4. Number of the total descriptions per nursery school of every post on group 4・5.

第4図. 記述領域数4・5グループの役職ごとにみた保育所あたり延べ記述数.

25%と少なかった。所長が園芸活動にかかわった保育所の年代構成をみると、20代から順に38, 43, 57, 77, 18%と50代がもっとも高かった。

また、記述領域数の多かった4・5グループについて役職別に保育所あたり延べ記述数(役職ごとに平均記述数に各年代の平均人数を掛け合わせ、保育所数で除した値)を年代ごとに算出した。この値は、同じ役職の中ではかかわった人数が多いほど高い値を示し、役職間では、かかわった人数や平均記述数が多いほど高い値を示す。

その結果、所長がかかわった場合は50代、主任がかかわった場合は40代から60代、担任らで行った場合は40代の割合が高かった(第4図)。これは、担任は40代に多く、所長は50代に多いことを示している。

このように、記述領域数の多いグループ4・5では、所長と主任がともにかかわる場合がグループ1・2より多く、40代以上とくに所長に多いとみられる50代の関与が多かった。

考 察

120園の保育のねらいと園児の言動の記述を保育指針の内容5領域に従い整理したところ、94%の保育所はそれぞれ保育のねらいをもって園芸活動に取り組んでいた。延べ記述数をみると、園児の言動が保育のねらいに比べて1.3~65倍多かった。

保育のねらいで記述保育所率の高い内容は、幼稚園を調査した先行文献と同様に「生長の過程を体験する」、「命を知る・命の大切さを知る」、「食育の一環」であり、園芸を保育に取り入れるねらいは、幼稚園と同様であった(第1表)。

園児の言動で記述数をもっとも多かったのは、「食べた、食べようとした」であり、植物の栽培が園児の食べる意欲につながることを期待し、またその効果も強く認識されていたことが示された。

保育のねらいと園児の言動の記述は、「命を知る・命の大切さを知る」と「命を知った・命の大切さを知

た」のように、それぞれ呼応する内容が約半数あり、ねらいを意識しながら園児の様子を観察していたことが伺えた。

保育のねらいには「感性が育つ」のように、抽象的な表現も見受けられたが、園児の言動では「嬉しそうにした、喜んだ」、「変化に気づいた」のように、実際に園児の様子を観察したからこそ表現できると思われる記述が多くみられ、具体性に富んでいた。

このように、約半数の保育のねらいと呼応した内容のほか、保育のねらいのみ、園児の言動のみに分類された内容があり、結果として保育所あたりの平均記述数は、保育のねらいより園児の言動の方が多かった(第1表)。これは、保育者が保育のねらいの内容ばかりでなく、保育のねらい以外の園児の様子も多く観察し、園芸活動の効用として記述したことを示している。

保育のねらいに比べて園児の言動では、その記述量や内容にばらつきが顕著にみられた。そこで、園児の言動の記述内容が内容5領域に幾つあてはまるかで保育所を三つの記述領域群に分け、グループ間の記述の違いを検討した。

保育のねらいと園児の言動の記述内容が属する領域をみると、どのグループも「環境」や「表現」が多かった(第1図)。記述した保育所の割合でも同様であった(第2図)。これは、園児が植物とかかわることを保育のねらいとし、その喜んだり驚いたり不思議に思ったりする様子をもっともよく保育者の目に留まったためと推察される。

保育のねらいについてグループ間の違いは少なかった(第1図)。一方、園児の言動では記述領域数の少ないグループ1・2の記述内容は、「環境」と「表現」に偏っており、記述領域数の多いグループ4・5では、多くの保育所がすべての領域にわたり記述し(第1, 2図)、内容も豊富で独自性に富んでいた。

例えば、グループ4・5では「収穫を楽しんだ」ばかりでなく、「味や食材、調理に関心を示した」と、園児の興味や関心の広がりも観察しているし、「気に掛け観察」、「変化に気づいた」、「色や形、感触、においに気づいた」、「数、大きさ、重さ、長さに関心を示した」、「絵は明らかに違ってきた」のように、園児の言動を細やかに具体的に記述しており、文章にも熱意が感じられた。

このような園児の言動に対する気づきの細やかさから、グループ4・5の保育者の園児をみる目は広いと評価できよう。園児をみる目が広がる要因として、保育者の園芸活動の効用への関心が高いことと、保育者自身の優れた観察力の二つが考えられる。

では、この視野の広さは、園芸活動の豊富さや保育者の園芸活動のかかわり方とどう関係しているだろうか。

まず、園芸活動について三つの記述領域数群を比較したところ、活動頻度だけグループ4・5がグループ1・2より多かった(第2表)。その他の園芸活動は同様で

あった。

保育者のかかわりでは、グループ4・5では、所長と主任の関与はグループ1・2に比べて多く（第2表）、ベテランである40～50代の保育者の参加、とくに所長がかかわった場合、50代の割合が高かった（第3図）。

以上のことから、グループ4・5に関してまとめると、59%の保育所は「毎日」作業を行い、66%の保育所は「給食に作物を提供」していた。所長を中心とした経験豊富な保育者がかかわり、園芸活動は日常的に保育に組み込まれ、園児は日々のなかで収穫物を食べる生活を送っていた。このような日常的な取り組みが、園児のさまざまな言動の表出につながり、保育者は、その園児の言動をよくみて園芸活動の効用に気づいたとみられる。

中高年の保育者は、一般に若年者と比べると、これまでに園芸活動を経験したことが多く、園芸活動の効用を実感していると考えられる。さらに所長や、保育士を束ねる主任は、園長会などで行政とかかわることが多く、食育を含めて栽培に関する情報を豊富に入手している。このような行政とかかわりも所長、主任が園芸活動にかかわっていく動機の一つになったと推察される。

つまり、ベテランである中高年の、栽培に意欲のある保育者達が活動にかかわることで、園児たちは日常的に植物とかかわり、保育者は持ち前の観察力を存分に発揮したと考えられる。

本調査から、園児が園芸活動にかかわることの意義を整理すると、豊富な作物、多頻度で多種類の作業によって園児たちは自然と豊富にかかわり合った。この経験を通して、園児たちは五感に強い刺激を受け、感覚を鋭敏にし、色、形などの認識を発達させ、それらが植物への興味を呼び起こし、草花をよく理解した。

自分たちが育てた野菜を食べることによって食欲や栽培意欲が増し、これらの思いを伝えるために言葉を用い、コミュニケーションが活発になり人間関係が豊かになった。言語がよく用いられるとコミュニケーションや自我は発達する（鹿取、2003）ことが、本調査によく表われている。

保育経験豊かな観察力をもった保育者は、園芸活動に関心をもち、幾つかの保育のねらいをもって園芸活動に取り組んだ。そして、園児たちに現れた言動を多面的にしっかりみてよく捉えた。それは、多領域にわたり多彩で具体的に生き生きとした記述に表れた。これは、保育者が心を開いた広い視野で園児をみる姿勢が、教育的な効果をよりよく捉える原動力になったことを示すものと

考えられる。

以上のことから、保育者は、園児の発達をみる内容5領域の意図をよく認識し、切磋琢磨して観察力を磨き、園児を広い視野でみていこうとする姿勢をもつことが園芸活動において求められているといえよう。

摘 要

2004年に福岡市、2005年に北九州市の認可保育所で園芸活動に関するアンケート調査を行ったところ、園児の言動の記述に違いがみられた。記述内容の属する領域数の多少で保育所を分類し、記述の違いが何に起因するかを探った。

記述領域数の多い保育所では園芸活動に取り組む段階から多くの保育のねらいをもち、おもに中高年の保育者を中心として所長と主任と担任が協力して園児の日常的な園芸活動にかかわっていた。園児の言動に関する彼らの記述は、保育指針の内容5領域（環境、表現、健康、人間関係、言葉）のすべてにわたり、記述数も多く、内容は多彩で細かく具体的であった。これは、保育者らの保育経験、関心、さらには観察力によるものとみられた。

引用文献

- 稲垣佳世子. 1995. 生物概念の獲得と変化－幼児の「素朴生物学」をめぐって－. pp.160-175. 風間書房. 東京.
- 梁川 正・河嶋喜矩子. 2003. 幼稚園における植物栽培活動とその意義. pp.3-8. 40周年記念 農業学習の教育効果に関する総合的研究. 日本農業教育学会・日本農業教育学会課題研究委員会. 京都.
- 鹿取廣人. 2003. ことばの発達と認知の心理学. pp.214-219. 東京大学出版会. 東京.
- 厚生省. 1999. 保育所保育指針. p.7. フレーベル館. 東京.
- 柴崎正行. 2001. 第1章 保育の基本と保育内容のとらえ方. pp.7-8. 柴崎正行・田中泰行（編）. 保育内容「環境」. ミネルヴァ書房. 京都.
- 田中敏明（編著）. 2000. 園児の園生活と成長の姿. p.191. ミネルヴァ書房. 京都.
- 山本俊光・森 啓一郎・松尾英輔. 2006. 保育所における園芸の保育効果－福岡市の事例から－. 人間・植物関係学会雑誌 5(2) : 13-18.